デレマスマフィアパロ置き場

ホルマリン漬けパトラッシュ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デレマスのマフィアパロ置き場になります。はＴｗｉｔｔｅｒの「#デレマスマフィアパロ」が元。是非検索してみてください。

全体的に、登場人物の年齢を＋２～３歳するとちょうどいいかもしれません。

０６／０６／２０１７　―　短編集から、連載へ変更。

注意！　／　Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ！

当作品には、以下の要素が含まれます。

・乱暴な言葉使い

・流血・暴力等の残酷な表現

・登場人物が殺人を行う
・違法薬物の登場
・喫煙
・銃砲刀剣類の使用
・年齢改変
また、なるべく少なくしているつもりではありますがキャラ崩壊があります。
薬物乱用ダメ、ゼッタイ。お酒、タバコは２０歳になってから。

アメリカ合衆国　日本州ぐらいの感覚でアメリカンな日本が舞台です。

目次

マパロその０１（加蓮・奈緒）――1
マパロその０２（アナスタシア）
7
マパロその０３（奈緒）――14
マパロその０４（一ノ瀬志希）――26
マパロその０５（塩見周子）――40
その０６――54
その０７（新田美波）――61

マパロその０１　（加蓮・奈緒）

『本部より哨戒中の各局、東署管内、○○通り―△△にてけん銃のようなものをもって徘徊している男がいるとの通報、応答可能な局どうぞ』

「東１８より本部、応答可能です。どうぞ」

『本部より東１８、了解。緊急走行コード３で対応されたし。どうぞ』

「１０―４（了解した）、１０―１０（通信終わり）。」

そういって助手席に座る相方は受話器を戻した。運転中なので横目で確認すると、あろうことかポテトを掴みながら無線を操作していたようだ。

「せめて受話器触る時はポテト置いとけって…」

「えー？だって銃だよ？徘徊だよ？早く応答しなきゃ危ないじゃん。」

ケラケラと相方の――　北条加蓮はコーラを飲み下しながらサイレンのスイッチを入れ、マイクに声を吹き込み、周りの一般車両を退かし、進路を作る。私はそれを確認するとハンドルを切ってアクセルを踏み込んだ。

組み始めてから1年が経つが、加蓮のこういうところは変わらない。私のほうが1年年上のはずだが、この数ヶ月ずっとからかわれ続けている気がする。

しかし、一般哨戒の日にばかりこういう事案に遭遇している気がする。ライフルは車の後ろに積んでいるが、おそらく最初に到着するのは私達だろう。取り出している暇は間違いなく無い。

「加蓮、ショットガンよろしく。」

助手席の横にはショットガンが収められている。コレが最大の火力になりそうだ。

「了解。長くて好きじゃないんだけどなあ、コレ。」

本当にこいつは。文句しか出てこないのかと思いながらパトカーを飛ばす。

そんなことを話していると、指示のあった住所に近づいてきた。

「奈緒、あれ。」

加蓮の指をさす方を見ると、たしかに銃を持った小太りな男が居た。私がブレーキを踏んでパトカーを止めるとほぼ同時に、加蓮がドアを開け放つ。

手にしていたショットガンを男に向け、

「警察よ！銃を捨てて！」

加蓮は大声で叫ぶ。

私もドアを開け放ち、腰に下げた拳銃（グロック）を抜き、男に向ける。加蓮に負けじと大きな声で相手を威嚇する。もちろん男に当てる自信はあるが、できれば撃ちたくはないので指

示に従って欲しい。
　男は警告なんて気にも留めないかのように、こちらに背を向けて立ち尽くしている。警告を聞くどころか、こちらの存在に気がついていないかのようだ。
　加蓮が目配せをしてくる。私は仕方がない、と拳銃を斜め上に向けると、２発、空に向かって撃った。
「最後の警告よ！銃を捨てて、跪きなさい！従わなければ――」
　撃つ、と言おうとした瞬間、男は叫び声を上げた。見た目からは想像出来ない勢いでこちらを振り向くと、手にしていたけん銃を、フルオートでばら撒いてきた。
　これはマズイ、と私も加蓮もとっさにパトカーのドアに隠れる。きっと機関けん銃の弾ぐらいなら防いでくれるだろう。
「何よ！あいつ―機関けん銃サブマシンガン持ってるじゃないの！拳銃って話だったじゃない！」
「通報を鵜呑みにするからだよバカ！アタシだってけん銃だと思ってたけど！完全に規制に沿ってない銃じゃんか！」
　どちらも歯を食いしばり、銃撃が止むのを待っている。私は無線機のスイッチを入れると、
「東１８より本部、現場に到着コード６、銃撃を受けた！至急応援求む！」

『本部より東18、了解。付近のユニットは急行してください。コード3。』

ふと銃声が止んだ。男は弾切れを起こしたのだろう。棒立ちのまま機関けん銃の弾倉を交換していた。

勝機、とばかりに二人は立ち上がり、男に向かって引き金を引いた。ショットガンと拳銃の、似たようで違う銃声が何発も響く。

合わせて10発ほど叩き込んだだろうか。男は銃を落とし、仰向けに倒れ込んだ。男の状態を確認するため、銃を向けたまま男に近づく。

加蓮が男が落とした銃を遠くに蹴り飛ばした時だった。突然男が跳ね起きる。銃で撃たれた人間が出来る動きではない。ドラッグでも使っているのか、跳ね起きた勢いのまま、加蓮に飛びかかった。

加蓮はとっさに銃を向けようとするが、蹴り飛ばすために違う方向を向いていたためか。男が飛びかかるほうが早かった。男は加蓮のマウントを取ると、押しつぶそうと言わんばかりに力を込める。加蓮も負けじと抵抗するが、鍛えていても男と女だ。次第に押され始める。奈緒は銃を相手に向けようとするが、加蓮に当たる可能性を考えると、

「何すんだお前！加蓮から離れろ！」

と叫びながらブーツの爪先（爪先が金属製のアレ）を男の脇腹に蹴り込む。堪らず男は勢い良く吹き飛ぶ。

加蓮から離れたところで、奈緒は躊躇わず拳銃の引き金を引いた。男の胸部に弾丸は吸い込まれるように当たった。

加蓮も既に立ち上がり、腰に下げていた拳銃を抜き放ち、男に向ける。当たりを沈黙が包む。分単位で時間を感じるが――実際には１０秒そこらの話だろう。男は微動だにしない。

奈緒は倒れた男の状態を確認すべくゆっくりと近寄った。心臓か肺にでも当たったのか、どす黒い血を流した男は呼吸をしていないようだった。それを見た奈緒は本部へ報告すべく、肩に付けた無線機のスイッチを入れる。

「東１８より本部、容疑者を射殺。警官の負傷は無し。どうぞ」

『本部より東１８、１０―４。付近を閉鎖し、現場保存に当たれ。』

「１０―４。」

報告し終えたところで、加蓮の方を見ると、

「サンキュー、奈緒。助かった。」

微笑みを浮かべながら、加蓮は礼を言う。

「おう。ところで、こいつは…」

それを見て、安心したように奈緒は言いつつ、男にも視線を向ける。

「多分そうだろうね、目の焦点合ってなかったし。ヤク中でしょ。多分今流行ってるア

レ。」

「だよなあ…」

二人はこの街で最近流通している、ある麻薬を思い浮かべていた。

マパロその０２（アナスタシア）

違法な代物の取引の警護。報酬は良くないが、イレギュラーが起きる可能性が低く、比較的安全な仕事とされる。食いつなぐためにはちょうどいいので、たまに請ける仕事だ。

報酬は良くないと言っても、一人で食べるだけならある程度の期間過ごせる分のギャラは入るので、ワタシはこの仕事を主に請け負って生計を立てている。

今回の取引も無事に終了できそうだ。他の護衛達が最後まで気を緩めない中、ワタシはふと、昔のことを思い出していた。あの日も、こんな風に雨が降っていたはずだ。

日本に来てから、2回か3回目に受けた仕事の時だったと思う。警察のガサ入れに出くわした。逮捕されるのも殺されるのも御免だと最低限クライアントが逃げ出すまでの時間を稼ぐと、自分も一目散に逃げ出した。

しかし警察もしつこく、わざわざ区画ごと閉鎖して一網打尽にすると言わんばかりに激しく追い立ててきた。

―チクショウ。妙に”美味しい”話だと思って参加してみれば。警察に最も狙われ

る可能性の高い銃器取引の現場だったとは。しかもライフルの詰め合わせなんて優先度が高いであろうものを。

冷たい雨にイラついて、あの胡散臭い依頼仲介人（ブローカー）の息の根を脳内で3回ほど止め、現実でも息の根を止めてやろうかと思っていた時。網を張っている警察官と出くわした。

警察官はワタシの姿を認めると、笑顔で声をかけてくる。多分職務質問をしたいのだろう。しかし身分証も無しに懐にある拳銃を認められたら間違いなく捕まる。隠し通せるか？無理だ。

ならば先手必勝、声を掛けてきた警察官の顔面に左手で拳を叩き込みながら、右手でショルダーホルスターから拳銃（マカロフ）を抜き放ち、もう一人の警官の顔面を撃ち抜いた。

殴られて怯んでいた警察官は優秀だったのだろう。銃声を聞いて拳銃を引き抜こうとするが、こちらが頭に狙いをつけるほうが早い。少し狙いがブレたのか首に命中。仕方なくもう一発。頭に命中。

なんてことだ。あと少しで逃げ切れただろうに、自分から目立つ音（銃声）を作り出してしまった。更に逃げる。拳銃の残弾を思い出す。時間稼ぎで3本、途中で1本の弾倉を使った。残りは今装填されてる5発だけ。

それを使い切れば残りはナイフだけ。考えれば考えるほど自分の状況が最悪に近い

事に気がついて、余計に腹が立つ。
追手を振り切り、人通りのない裏路地にたどり着いた。セーフハウスに帰るなら、息と服を整えるべきだろう。
「ちょっと君、こんなところで何して――」
不意に、後ろから声を掛けられた。女の声、しかも至近距離だ。半ば反射で振り向いて銃を向けると、とても小柄だが――婦警ではないか。
躊躇わず引き金を引く。撃鉄が撃針を叩き、更に雷管を撃針が叩いて、薬室に居る弾が飛び出せば、その婦警の命も一瞬で奪えるはずだった。
しかし引き金を引いても弾は出ない。不発弾だ。このオンボロめ。私が引き金を引いたことを認めた婦警は、腰を落としてワタシの銃を奪いに来た。
当時のワタシは、まだ体が幼かったこともあり肉弾戦が苦手だった。婦警はワタシの拳銃をいとも簡単に叩き落とすと、腕を捻り上げにかかってきた。させじと腕を引き、相手を蹴って間合いを切る。
腰につけたナイフを抜いたが、それもまた叩き落される。空手で婦警と揉み合いになる。しかし向こうはあくまで確保に留めるつもりなのか、攻撃が甘い。甘んじて一発を受けながら、ワタシは意識を刈り取る一撃を繰り出した。

気絶した婦警を横目に、武器を拾うことも忘れセーフハウス目指して歩き出す。一歩一歩が重く感じた。あの婦警、妙なダメージを残しやがって、と口の中に溜まった唾液と血液を吐き捨てる。

今思えば、脳が揺さぶられでもしていたんだろう。武器を拾うことすら忘れるなんて、あまりにも素人臭すぎる。

セーフハウスまであと少し。もう目の前だ。そんな中、ワタシの視界は突如黒く染まった。

目が覚めた時、ワタシは知らない部屋のベッドで寝ていた。病院にしては調度品の具合が違う。どこだここは？

薄目で周りを見る。――誰もいない。手足に感覚を集める。――拘束はされていない。

音を立てないよう、ゆっくりと体を起こして周りを見る。部屋の毛色からして、若い女性の部屋だろう。ふと鏡が目に入った。全身鏡と呼ばれる、縦長の鏡だ。

そこに写ったのは、自分のものではない服を着た自分の姿だった。

「あら、起きたんですね。」

ふと、声をかけられる。ソプラノボイスだが、落ち着きのある声だ。そちらを見れば、若い女性の姿。

「びっくりしたんですよ、帰り道にボロボロの女の子が倒れてるんですもん。」

話す内容から、ワタシの正体はバレていないのだろう。ならば、。

「アー…ちょっと、事故、遭いました。ココ、どこデスカ？貴方は、誰…デスカ？」

自分の容姿を利用して、わざとらしく、片言の日本語で返す。

「私は新田美波といいます。ココは私の部屋。貴方のお名前を教えてもらっても？」

ワタシは名乗るかを悩んだが、恩人に名乗らないのも失礼だろう。

「ワタシの名前、アナスタシアといいます。」

――これが後々長く付き合うことになる、新田美波との出会いだった。

今思えば、美波はなんと不用心な女性だろうか。治安の良くないこの街で、道端に怪我だらけの人間が倒れていたら、ワタシはまず見なかったことにする。例えそれが子供でも、ましてや女でもだ。

美波に拾われ、目覚めたその日の夜中にに美波の部屋を出た。いつまでもココにいれば美波を巻き込むかもしれないし、何よりこの場所の安全が確保できていない。

美波は大学生だという。この国で大学に進むことの出来るのは、所謂エリートと呼ばれる層の人間たちだ。だったら尚更ワタシのような人間と関わるべきではない。そう思い部屋を出たはずだが、驚愕した。なんと美波の部屋があるアパートはセーフハウスがすぐそこではないか。

セーフハウスを変える算段をするが、どうやっても今すぐと言うのは無理だ。まず資金が足りない。野宿も考えたが、リスクが高すぎる。どうするかを考えながら、ひとまずセーフハウスに入る。

今回の一件で拳銃とナイフを落としてしまった。駆け出しとは言え、これを生業とする人間としてはあるまじき行為だ。ため息をつきながら、隠していた予備の拳銃を取り出し、メンテナンスをする。

落ち着いてから、状況を整理する。問題はあの美波とかいう女学生だ。素性は知れていないし、ひとまず置いておいて良いだろう。どちらかと言えば、気絶させた婦警のほうが不安だ。顔を覚えられていたら厄介だ。

あれだけ頭部を殴ったら記憶が飛んでいたりしないだろうか。不安要素を頭の隅に追いやりながら、睡眠をとるべく瞼を閉じた。

――その後何もなかったから良かったものの、これも今思えば相当危険な行為である。何事も無かったため、ワタシはセーフハウスを変えずにそのまま暮らしていた。

幸いしばらく仕事をしなくても済むぐらいの報酬はその仕事で手に入ったし、きちんと時間稼ぎをしたおかげか評判も良い方についた。あの仲介人からは二度と仕事を受けなかったが。

今回の取引は無事に終了したようだ。依頼人はそれなりに高価そうな車に乗り込むと、自らの住処に引き上げていった。ワタシもセーフハウスに帰るべく、自前の二輪車（バイク）に跨った。

もちろん正規の免許なんて無い。汚職に塗れた警官に賄賂を渡して、９９％本物の免許を取得した。この国なら良くある話だ。尾行が居ないかだけ警戒しつつ、何度かダミーのルートを噛ませてセーフハウスに到着する。

また暫くの間は仕事をしなくて済むだろう。ワタシは暫く送ることが出来るであろう、悠々自適な生活を想像し、上機嫌で風呂を浴びた。

マパロその０３（奈緒）

「新種の違法薬物ぅ？」

奈緒は日頃から情報屋と呼ばれる人種を利用している。アングラの情報を集めるにはアングラの人間と接触するのが一番早い。警官としては褒められる行為では無いだろうが――――正直汚職も多いこの街の警察では渡される情報だけでは不足どころか、偽情報まで出回る始末だ。

奈緒の知っている情報屋の中でも幅広く、そして知る限り最も正確な情報をもたらしてくれる情報屋と面会していた。一ノ瀬志希、と宮本フレデリカだ。

「そっ、この志希ちゃんの徹底的な解析の結果、こいつは今までに見たことのない違法薬物であることが確認されましたー！」

正直、奈緒はこいつと関わったことは正解なのか今でも疑問に思うことがある。情報の幅広さや正確さは手持ちの情報屋の中では間違いなく最高なのだが、如何せん性格に難がある。危険な稼業を金持ちの道楽で始めるような人物である。そのおかげで情報料がとても安いのだが。

今回も、一週間ほど前に押収した薬物の解析を頼んだのだが、嬉々として解析に取り

組んだ上にさぞ楽しそうに報告する姿を見るとどうしても不安を覚える。
「こいつは少量摂取するだけなら基本的には気持ちよくトリップできるだけなんだケド、大量に、もしくは長期的に摂取すると巡査さんもご存知の通りの凶暴化やら痛覚麻痺やら、とにかく暴れるのに適した状態になるんだねー。これを開発したやつは多分天才だと思うにゃー。」
志希はズズ、と冷めた缶コーヒーを啜って息をついた。
「それだけじゃなくて、こいつを製造・販売しているであろう組織もなかなか曲者っぽいよ？」
とはフレデリカの談。
ここ最近報告件数が急増しているこの麻薬。３４６号なんて名前がついたから、現場じゃ「ミシロ」なんて呼ばれてたりする。そのせいで警察は増える事件に振り回され、初動に当たることの多い地域課は見事に負傷者を増やしている段階だ。
「曲者って、どういうことだよ。警察じゃ”とにかくデカイ組織で、最近急激に勢力が増した”ってことしか掴んで無いんだ。」
奈緒は志希とフレデリカを問いただすが、二人は目を合わせて、「情報料があと２枚足りませーん（はーと）」と抜かす。奈緒は仕方ない、と言った様子で、２枚の紙幣を渡した。

「誘拐、殺人、武器麻薬取引なんでもござれ。昔から根付いてた組織からすれば目の敵。そりゃ他人のシマを断りもなく荒らしまくったら良い印象なんて持たれないよね。巡査さんも気をつけてね？アタシ達だって危なすぎて潜ろうと思えないぐらいの組織だから、下手に潜れば火傷で済まないかもよ？」

志希は中身を飲み干したアルミ缶を放って、一つの封筒を差し出す。

「それはオマケ。中身を見ればわかる。でも、見たら燃やしてね？」

唇に指を当て、ウィンクをする志希。それを見た奈緒は、よっぽどの情報が入っているのだろうと速やかにカバンに仕舞った。

「ありがとうな志希、ありがたく使わせてもらう。コーヒーの分は置いとく。アタシは先に行くわ。」

奈緒はコーヒーの金額分の硬貨を志希に投げると、足早にその場を去った。

「…本当に、気をつけてね、巡査さん？多分キミが思ってるより、あの組織は深いよ？」

＊　＊　＊　＊　＊

家に帰った奈緒は、封筒の中身を確認していた。中に入っていたのは、薬物がもたらす効果や推測される原料、ここ数ヶ月で出回ったであろう範囲が記されていた。そし

て、数日後に取引が予想されるというメモを見つけた。
本来ならば専門の部隊で強襲するべきだが、情報源が情報源なだけに動いてくれないだろう。奈緒は仕方なく単身偵察する覚悟を決めると、偵察に必要な情報を集め始めた。

数日後、取引が行われる場所へと私服姿の奈緒は一人歩いていた。カバンの中には護身用の拳銃（グロック）。このご時世では一般人も護身用に拳銃を携帯することも珍しくない。警察手帳（バッジ）はズボンの内側に隠した。バッジさえ見つからなければ、万が一見つかってもたまたま居合わせた一般人として逃げれる可能性も無くはないだろう。
そんな気休め程度の保険を掛けつつ、予め予定していた場所へと急いだ。

奈緒の予想通り、予定していた場所は取引場所を覗き見ることが出来るようであった。奈緒は物陰に隠れて取引場所を見ていると、既に居た一台の他に、更に二台の車が入ってきた。車が止まり、中から明らかにカタギのそれとは違う雰囲気を纏った、武装した男たちが出てきた。いくら人影のない場所とは言え、最初からライフルを引っさげて出てくるとは、なかなか厳しい警備のようである。
そして、取引が始まろうかという時。首筋近くに反射しないよう黒く塗られた刃が添

えられた。
「あんた、どちらさん？…その手の人間じゃないよね？おまわりさんかな？」
奈緒はナイフを払って拳銃を引き抜こうとするが、相手の方が早い。相手はナイフを投げつけ、奈緒の体勢を崩すと間合いを詰め、奈緒を押さえつけた。
「っと、危ないなあ。安心してよ。やっぱおまわりさん？」
銀髪の女だった。奈緒は内心舌打ちをした。見抜く力の強い相手だ、嘘は通らないだろう。
「…そうだよ、殺すか？」
奈緒は睨みつけながらそう言った。
「安心してな。敵じゃないよ。味方でもないけど。あばれんといてね？」
銀髪の女は奈緒を話すと右手を差し出した。
「あたしは周子。少なくともあそこで取引をしてる奴らとは敵。敵の敵は味方って言うでしょ？ひとまず落ち着こうよ。アレの情報だって欲しいでしょ？」
差し出された右手に奈緒は迷ったが、そもそも相手に生死を握られているのだ。選択の余地はない。
「敵じゃないなら左手を得物から離してくれないか。アタシは奈緒。お察しの通りの身分だ。」

指摘をされた周子は「ありゃ、気づいてたかー。」と空手の左手を上げ、ひらひらとさせた。

「奈緒ちゃんはあそこで取引してるブツとメンツはどこまでご存知？」

壁に背を預けた周子は奈緒にタバコの箱を向ける。それを見た奈緒は手振りで断り、

「ああ、最近この街で急速に出回ってる。警察じゃ”ミシロ”って呼んでるよ。んで、そいつの流通にはかなりデカイ組織が関わってるってのもな。…あんた、あっち側じゃないな。地元の裏社会？」

半ばカマかけだが、正解だったようで「そそ、シマを荒らされてる地元の裏社会だよ。」と、軽い答えが帰ってきた。

「だからこそ、警察さんとはすこーし関係を持っておきたいなって思ってるのよ。アレが出回ったせいで、儲けは減るわ奴さんらがでかい顔するわで、大変なんやわー。あたしはフリーなんだけどね？奴さんらの依頼はきな臭くて、とてもじゃないけど受ける気にならないんだよねー。そもそもあいつら自前の戦力あるから依頼も殆ど無いけど。」

周子は紫煙を吐きながら、とても憎たらしそうに語る。フリーランスは依頼数が減るのは相当痛いようで、タバコも減らしちゃったわと周子は漏らす。

「奴さんら、どうも外国のマフィアさんも原材料関連でほんの少し絡んでるらしくてね？ロシア系か中国系か・・・多分そのどちらか。でなければいくらこの国は銃器所持が

許されてるって言っても、あんな重装備なんか揃えれないよね。車は殆どが完全防弾だって話だし。」

「もうひとつ。近々大きい抗争が起きる。アイツラを快く思わない地元の組織は、奴さんらを少し懲らしめようと計画を練っているみたい。ココからはあたしの予想だけど、多分管区警察が経験したことのない規模の抗争になる。出来る限り一般人への被害は避けようとしてるみたいだけど、もしあたしの予想通りになったなら、絶対表社会に隠しきれない被害を与えるかもしれない。っつーわけで、多分あと1ヶ月ぐらいは警戒しといたほうが良いんじゃないかな?」

　これあたしが漏らしたなんて誰にも言わないでよー、と軽い出来事を扱ったかのように言う。

「待てよ。その情報は確かなのか?もし本当にそんな動きがあるなら、うちの刑事部がとっくに掴んでるはずだ。でも何も…」

「警察(おたくら)の上は相当どっぷりみたいだね。地元組織の動きをなるべく阻害しないように、黙ってるんじゃないかな?」

＊　＊　＊　＊　＊

二人はそのまま取引を覗き見つつ、幾つかの情報を交換していた。ミシロの取引も終わったようで、離れたところでは男たちが撤収作業をしていた。二人の情報交換もそれなりに有意義に終わり、こちらも撤収しようという時だった。

奈緒が手に入れた情報をどの様に扱うかを悩んでいると、一挙動で周子が拳銃を抜いて撃ったかと思えば、ぐぎゃ、と男のうめき声がした。

「あちゃー。一発で仕留めるつもりだったけど、やっぱ銃は扱いが難しいなあ。奈緒ちゃん、敵（おきゃく）だよ敵（おきゃく）。ほら戦おう?」

周子の拳銃には減音器（サプレッサー）が装着されているようで、パスンパスンと抑えられた銃声が何回も響く。奈緒もカバンから拳銃を取り出して、物陰から撃ち始める。しかし相手も物陰に隠れて、弾は遮蔽物で止まる。徹甲弾でも使えば遮蔽物ごと狙えるのかもしれないが、生憎持ち合わせてなどいない。長期戦になる可能性を読んだ奈緒は、撃つ速度を緩める。

攻撃が弱まったからか、物陰に隠れていた男達が乗り出して銃撃を浴びせてくる。響く射撃音は3つ。すべて違法なフルオート射撃可能な銃だ。隠れるのに利用している遮蔽物が削れる音や、近くを銃弾が通る音が奈緒の耳に届いて、思わず身をすくめる。

「あかんわー、奴さんら本気で殺しに来てるわー。」

激しい銃撃を受けているというのに、のんきな声が隣から聞こえた。見れば周子は拳

銃を床に置いて、新たなタバコを咥えていた。
「本気で殺しに来てるわー、じゃないだろ！タバコなんて吸いやがって！あんたも手伝えよ！」
怒鳴られた周子はそんなに焦らなくてもすぐ近づいてきたりしないよー、やっぱキミも吸わない？とタバコを向ける。奈緒はやってられるかと無視を決め込み、男たちに向けて銃を放つ。男たちは撃たれれば隠れ、隙があれば大量の弾丸を叩きつけてくる。よく訓練されているようで、組織とやらの強大さが伺える。これはダメか、と奈緒が思っていた矢先。
「奈緒ちゃーん。この銃貸すからちょっと援護して？」
またしてものんきな声が聞こえた。はぁ？と隣を睨めば、残っていたのは周子の拳銃のみ。どこへ行った、と探せば男たちの懐に飛び込もうとしている周子の姿があった。
「あのバカ！」
奈緒は周子を援護しようと照準を男の一人に向ける。しかし、援護は必要無いように思えた。周子は位置を調整して男たちの射線から外れたかと思えば、ナイフで一人の首を切りつけ、他の男めがけて投げ飛ばした。そしてまた一人の首を切る。最後に残った男は動揺して乱射するが、周子は飛んでくる銃弾を曲芸のように避け、最後に残った男の脳天にナイフを突き刺した。

体感で２０秒も無いぐらいだろうか。奈緒が唖然としていると、周子が戻ってきた。
「お待たせー、鉄砲返して？」
あの光景を見ては逆らえる訳もなく、奈緒は素直に周子に拳銃を返した。

＊　＊　＊　＊　＊

２０分ほど早足の移動を続け、追手が来ていないことを確認した二人は足を止め、息を付いた。
「あんた、本当に人間か…？サイボーグとか、宇宙人じゃないよな？」
「何言ってるん、人間に決まってるっしょ？なんなら触る？」
本当に人間なのか疑ってかかる奈緒に、周子はなぜか胸を反らす。触る？と聞いてくる周子に「触らねーよ」と奈緒は言うが、サイズは自分と同じくらいか、と胸の中で密かに思う。
「とりあえず、追手も居ないみたいだしココで解散かな？あたしおなかすいたーん」
周子は疑問形で言うが、背中を向けて歩き出す当たり、意見はさせないらしい。奈緒もそれならば、と自宅の方面に歩き始めたが、尾行を考えて一直線には帰らずに、途中でショッピングモールに寄ることにした。行動半径がバレることは好ましくないので、

きちんといつもなら行かない店に行く。今のところ気配は無いが、やっておいて損は無いだろう。

＊　＊　＊　＊　＊

結局のところ、尾行されることはなかった。家に戻ってきた奈緒は拳銃の弾倉を抜いて薬室から弾を抜く。拳銃とバッジを机の上に置くと、シャワールームへと向かった。自分の気づいていない怪我をしていないか、シャワーを浴びながら確認する。街を歩いておいて今更な気もするが、風穴が空いていたら面倒だ。幸いなことにその心配はないようで、体に風穴は空いていなかった。拳銃のクリーニングやら、このあともやることは幾つかあるが、今ぐらい一息ついてもいいだろう。

そう思った矢先、電話が鳴った。自分の携帯を見ても着信していない。着信音はカバンの中からだ。恐る恐る覗き込むと、見慣れない携帯が入っていた。取り出してみれば本体に「ナオちゃんへ（はーと）」とデカデカと書かれていた。鳴り止む気配も無いので応答すると

「やーっと出てくれた。やっほー奈緒ちゃん。周子ちゃんでーす。トラップとかは警戒しなくていいよ、その携帯あたしが入れたやつだから。これからも奈緒ちゃんと仲良く

したいなあと思って、こっそり携帯電話を入れさせて頂きましたー。もちろんそっちから掛ける事もできるから、なんか連絡したいことあったらよろしゅー。じゃあねー。」

奈緒が返事をする間も無く、一方的に要件を告げた周子は通話を終了した。一回こっきりの縁だと思っていたが、そうではないようで、明らかに使い倒す気マンマンといったようだ。奈緒はため息を付くと、デカデカと書かれた文字を消すべく、クリーナーを探し始めた。

マパロその０４（一ノ瀬志希）

一ノ瀬志希は情報屋である。前職は研究者であった。研究者だった時に取得した特許のお陰で、道楽をするぐらいの財産も築くことが出来た。

情報屋を始めた理由も「おもしろそうだから」程度の理由だったが、情報の精度が高く幅広いおかげなのか客は少ないものの実入りも悪くないし、情報屋家業で知り合った相棒とも馬が合う。

研究者時代の専門は化学だったが、今はある薬物の解析に勤しんでいた。ココ最近、最近と言っても1年も前の話だろうか。街にある薬物が入ってきた。その薬物は非常に厄介で危険な代物のようで、警察では「３４６番目のヤバイ代物だった」ことから、語呂合わせで「ミシロ」と呼ばれているらしい。

基本は覚醒剤やコカインのような精神刺激薬で、大量摂取か長期的な摂取をしなければその本性は表さない。しかし一度大量に摂取すれば、幻覚や幻聴、痛覚の麻痺、激しい興奮作用と言った症状がある。これだけ聞けばよくある麻薬の一種だろう。

しかしこの薬物（ミシロ）の厄介なところは依存性が恐ろしいほど高く、その割に大量摂取時の

有害な中毒症状がほとんど無く、大量摂取した人物は恐ろしいほどの攻撃性を持つこと、そして常人離れしたパワーを手に入れることだろうか。

前述の通り痛覚麻痺の作用もあるため、これを服用（キメ）した犯罪者と対峙した警察官は「撃っても怯まない」「常人離れした力と瞬発力で取っ組み合いになれば勝てない」と報告し、警察では非常に危険度の高い薬物として認知している。

当然認知しているのならば警察も本腰を入れて捜査しているハズなのだが、お偉方が鼻薬でも嗅がされているようで現場の人間（下っ端警官）が対症療法として中毒者を逮捕か悪ければ射殺するかしている程度だ。

そう、恐ろしいのは薬効だけではなく、警察の頭に鼻薬を嗅がせ続けられる財力のある組織がこの薬物を流しているということだ。挨拶もなくこの土地で商売を始めたため、元からいた裏社会の人間や団体は大変お怒りで、薬物中毒者も最近はミシロに流れ気味なので収入も減った、とは周子の談だったか。

次に、ミシロを管理している組織は「プロダクション」と名乗っている。確かにプロダクションとは「制作会社」や「制作物を供給する会社」といった意味がある。考えた人間のセンスはさぞかし高いことだろう。プロダクションの連中もうまいこと情報を隠しているようで、なかなか尻尾がつかめない。系列組織や儲け優先の雑魚を何回か通

して持ち込むようで、バイヤーを締め上げても結局泥沼になって大本には行き着けない。

前置きはともかくとして、ミシロを作り出した人間はよっぽどの天才のようだ。もしくは偶然の産物か。でなければこんな「暴れさせるための代物」を作れるはずがない。

＊　＊　＊　＊　＊

「なーんだっかなー。」

思考が脱線気味になり始めた志希は、数時間前からデスクの上にあるコーヒーカップへと手を伸ばした。最近の裏社会では「ミシロ」や「プロダクション」でもちきりなのである。なんとしてでもミシロのルートを潰し、プロダクションを袋叩きにしたい地元組織は有益な情報を得るために賞金まで掛けたという。プロダクション系列の組織を特定した地元組織が近々カチコミを掛けるらしいが、良くて空振り。悪ければ蜂の巣になって返ってくるだろう。

何しろこんなトンデモを売りさばいて、かつ独占し続けていられる組織だ。当然大所帯で統制もされているだろうし、さぞかし武器も充実していることだろう。ひょっとすれば軍隊並みかもしれない。

プロダクションについての情報が欲しい、と考えた志希はある人物に電話をする。数コール後、相手が電話に応じた。平日のこの時間では出ないと思ったが、案外暇なのだろうか。

「あー、奈緒ちゃん？あたしあたし。志希ちゃんだよー。」

『なんだよ、志希か。どうした？』

「奈緒ちゃん、今週空いてる？遊ぼうよ。」

『今週なら日曜しか空いてないな。１３時半ぐらいにいつものとこでどうだ？』

「おっけー。じゃあ週末にねー。ばいばーい。」

盗聴に備え、この相手と通話する時は暗号を織り交ぜた上で最小限に済ませるルールにしている。デジタル全盛期の現代では電話の盗聴は表向き不可能とされているが、何事にも例外はある。

週末の予定が出来たことを相棒に伝えなければならないが、夕食の際にでも伝えれば良いだろう。

志希の相棒とは、フレデリカのことである。フレデリカは情報屋ではなかったが、あるきっかけで志希と知り合い、共に仕事をする内に今では暮らしも同じくする仲になった。フレデリカと生活を共にして長いが、彼女の過去はあまり知らない。一般家庭の産まれで無いことは聞いているが、それ以外は殆ど話さないのだ。

もちろん志希も無理に聞くつもりは無いし、家事や荒事の苦手な志希にとっては炊事洗濯掃除も、多少の荒事もこなすフレデリカの能力は今では無くてはならない存在だった。現にフレデリカが居なければこの部屋はホコリの積もる汚部屋と化しているだろうし、食生活も悲惨なこととなっていたに間違いない。

他にも情報が勝敗を分ける現代では情報屋と言うのは非常に脅威度の高い存在である。なにより情報屋と言うのは色々と恨みを買う。趣味嗜好から下着の色まで、様々な相手の情報を集めては売りさばくと言えば誰だって嫌うか恨むぐらいするだろう。おかげで志希も何度か危ない目に遭ったので、現在では拳銃を扱うぐらいはできる。

ただし志希の射撃センスは頭脳の良さに反比例でもしたのか、頭を狙えば爪先に当たり、足を狙えば眉間に当たると壊滅的なもので、果たしてその時にきちんと身を守れるのか、自分でも疑問に思っていた。

ミシロについての解析もまとめ終わり、プロダクションについて考察していた志希は、今度ばかりは危機感を覚えたのか日頃は放置気味の拳銃の点検を慣れぬ手つきで始めた。

＊　＊　＊　＊　＊

日曜日、奈緒との約束の日だ。志希はフレデリカの運転する車の助手席に乗り、今日話すべき内容を脳内で巡らせていた。その志希の腰には拳銃が入ったホルスター。もしプロダクションが本気を出して襲撃してきたなら拳銃があったところで変わらないだろうが、気休めに持っておく。何より志希は荒事が不得手で、抵抗ままならぬ内にやられる未来が見えるので一人ならまず逃げるが勝ち。

一方フレデリカも銃の腕が良いかと言えば並かその少し上程度だし、持っている武器も拳銃だけ。やはり二人揃っていても逃げるが勝ち。

二人が合流地点に到着する前に奈緒は来ていたようで、コンビニで購入でもしたのかサンドイッチを頬張っている。奈緒は二人を認めると、軽く手を上げて挨拶をした。

奈緒は志希が珍しく腰に拳銃を刺していることに気がついたようで、

「珍しいな、志希が拳銃持ってるなんて。」

「にゃははー、ちょっとね。最近裏社会もきな臭いもんで。流石にちょっと危機感抱いてるんだー。」

「そーだろうな、アタシも最近ひどい目にあったばっかりだ。で、今日はなんの用だ？」

「奈緒ちゃん、こないだミシロの取引見に行ったっしょ？あれ末端じゃなくて系列組織から現地バイヤーに渡すとこだったんだよね。だから奴らについての情報が欲しいん

だー。もちろん、対価は払うよ。」

奈緒がプロダクションについての情報を話し始める。非常に重武装であること、訓練を受けた人間であったこと、監視に気がついて襲撃してきたこと。奈緒の主観を交えたナマの情報は、とても有益な物だった。

そういえば、と奈緒は思い出したように周子という人間を知っているか、と聞いてきた。狐のような印象を受けたらしい。

「あー、やっぱ行ったんだあ。誰か敵にならなさそうな警官紹介してくれーって言われたから、奈緒ちゃん紹介したんだ。言ってなかったっけ?」

聞いてねーよ、と苦情が殺到するが、どこ吹く風と聞き流す。

「でも、周子ちゃんは悪い人じゃないし、繋がり持っといても損はないと思うんだけどにゃー。あとすごい強いし。」

「そこだよ、志希。アイツは何者なんだ?えらく人間離れした動きしてやがったぞアイツ。まさか化け狐とかじゃないだろうな、本当に人間なのか?」

「わかんない。でも化物の類ではないと思うから安心していいよ。それはさておき、今回の情報料どうする?なんかと交換?それとも、貸しにしとく?」

「貸しにしといてくれ。今は特に欲しい情報もないし、今度なんか入ったら教えてくれればいい。他に何もないならアタシは帰るぞ。」

他に何もないとを告げると、奈緒は「そうか、じゃあな」と言って歩き出した。すると突然、フレデリカが奈緒に向けて叫びだした。

「奈緒ちゃん！」

「なんだよ、大きい声出しやがって。」

「寄り道せず帰るんだよー！知らない人についてっちゃダメだめだよー！」

奈緒は一瞬驚いた様子。次に苦笑いをし、アタシは子供かよ、と歩いていった。志希は何事かと隣にいるフレデリカを見ると、彼女は自身の右肩を指差した。どうやら、監視がついているらしい。

「奈緒ちゃんにちゃんと伝わったかなー？」と聞けば、伝わったでしょー、とフレデリカ。自分たちもあまりのんびりしていられないと急ぎ足で車に戻る。あの尾行が奈緒に付いていたのか、自分たちに付いていたのか、今はまだわからない。

しかし、どちらにせよどちらも追われることになるようで、何らかの気配が自分たちをツケているのは確かだ。気配は二人か三人、残念ながら相手は出来ない。さっさと車に乗って尾行を撒くしか無いだろう。

「フレちゃん、気配幾つ感じる？」

「うーん、三人…かな？後ろだけじゃなくて前にもいるねー。前は一人だけだから殺っちゃうよ。」

そう言うとフレデリカは胸にあるホルスターから、拳銃（シグザウエル）を抜いて左手で握る。突如拳銃を手にした男が飛び出してくるが、フレデリカは予想していたと言わんばかりに拳銃を二発撃ち込む。男の胸と首元に当たったようで、男は口から血を吐きながら崩れ落ちる。

男が取り落とした拳銃を遠くへ蹴り飛ばし、二人は停めてあった車に乗り込む。スマートキーでありがたいことにボタン一つでエンジンスタートだ。エンジンが掛かったことを確認したフレデリカは、リバースレンジに入れると車の方向転換。方向転換をしたタイミングで、後ろから追ってきた男達が追いついたのか車に向かって撃った弾がドアに当たる。しかし防弾化された車の装甲に食い止められ、放たれた弾頭はひしゃげて地面に落下し、車は防弾車とは思えぬ強烈な加速でその場を離れていった。

「いやー防弾さまさまだねー志希ちゃん。」

「ほんとだねーフレちゃん。囮ハウス２号に逃げ込んじゃおうか。晶葉ちゃんに貰った例のアレも試したいし。」

「あいあいさー♪」

ご機嫌な返事を返したフレデリカは、舵を「囮ハウス２号」へと向け、警察に目をつ

けられないよう法定速度で走る。道中も追跡されているようだが、あえて適度に追跡させる。流石に市街地では撃ってこないようだが、長々と追跡されるのは気分が悪い物があった。

何度か同じところを周回し、郊外にある囮ハウスへとたどり着く二人。当然車を降りるということはせずに、そのままガレージに駐車、ガレージのシャッターを閉める。一人殺している上、尾行を完全に撒かずに来ているのだから襲撃待ったなしだ。

当然だが、二人はこの家に住んでいる訳ではない。名前の通り、いくつかある囮の１つだ。囮とは言っても、もちろん居住も可能だが、本領は尾行者を完膚なきまでに叩きのめすための家である。まだ明るい時間かつ、この地域には一般人の目がある。今すぐ来ることはないだろうと、迎撃システムを起動した二人は棚から菓子類を取ると、一息入れるのであった。

＊　＊　＊　＊　＊

当然襲撃されるとわかっている場所に長々と留まるほど二人も愚かではなく、二人は地下道からこっそりと脱出し、セーフハウスでゆっくりとくつろいでいた。

志希は監視カメラやセンサーから送られる情報が映されるモニターを眺めている。

今のところまだ押し入ったりされていないようではあるものの、囮ハウスの近くに不審なバンが止まっているようなので時間を見計らっているのだろう。

結局連中は深夜までおとなしくしていたようで、日付が変わって2時間してからようやくセンサーに侵入者が感知された。玄関扉がピッキングによって開かれたようで、玄関のカメラ映像に切り替えてみれば武装した人間が4人ばかり侵入していた。

外にバンが止まっているが、そちらにもまだ居るのだろう。侵入した犯人たちは二手に分かれて、一組はリビング。もう一組は寝室へと向かっていった。

――――まずはリビングからだ。リビングに居るシステムを起動させる。モニタの表示が切り替わる。システムは正常に動作したようで、家具に偽装していた自動銃座が、突如としてマシンガンを生やす。それを見た犯人たちは突然のことに驚いているのか、銃座をみて固まる。

「攻撃開始♪」と志希はコンソールのキーを押す。砲台に取り付けられたカメラが、自動で犯人たちを追尾し、シュタタタタタ、と減音器（サプレッサー）によって小さくなった銃声をリビングで響かせる。二人組は為す術無く倒れる。リビングに侵入したグループを排除。続いて寝室に向かったグループを始末する。

いくら減音器で音が小さいとはいえ家の中ではごまかしきれなかったのか、寝室に向かったグループもリビングへと進路を変えていた。カメラ越しに彼らを見ていれば大

して訓練されているとも言えない、雑魚といった感じである。装備も貧弱で、サブマシンガン程度だ。

志希は更にシステムを操作し、目標をこのグループに定めた。部屋の中は暗いので、銃座を動かさなければよっぽど気づかれないだろう。案の定、リビングに入ってきた二人組は既に物言わぬ状態となった仲間を見ると、リビングの中を探し回り始めた。

残念ながら自動銃座に気がつくことは出来なかったようで、この二人も一方的に銃座の餌食となるのであった。「お次は外の車かな？」と志希は自走地雷を屋外へ放つ。あとは何もしなくても自走地雷が片付けてくれるだろう。

――――映像が低解像度化処理されたものでよかった。もしそのままであれば、銃座によって蜂の巣にされる犯人らの姿をしっかりと見る羽目になっていただろう。

自走地雷が車を吹き飛ばしたことを知らせる通知がモニターに現れた。これですべての敵を排除しただろうが、爆発で消防や警察が集まる前に少なくとも囮ハウスの死体は処理しなければならない。

予め手配しておいた処理業者に連絡すると、５分あれば撤収まで完了するとのことだった。この国の優秀な警察でも、５分ではたどり着けまい。処理方法も任せることを伝えた志希は電話を切り、モニタールームを後にするのだった。

「志希ちゃん、終わったー？」

どうやら相棒はリビングで連ドラを見ていたようで、テーブルの上には空になったスナック菓子の袋が2つも放置されていた。
「終わったよー、あとは処理してくれる人に任せたし、尾行してた連中の大元も周子ちゃんに頼んどいたから、すぐ潰れると思う。今回はもう手を出すことはないかなー。」
「晶葉ちゃん謹製のロボットのおかげだねー。でも、フレちゃん今回はちょーっと疲れたかな？じゃあ、今日はもう寝るね？」
既に眠気たっぷりだったのか、フレデリカは珍しく会話を短く切り上げると自分の部屋へ歩いていった。しかし志希は、まだやることがあるためにコーヒーを愛用のカップに注ぐと、ラボへ歩く。
今回の襲撃はどの組織の犯行なのだろうか。少なくとも押し入った連中を見る限りでは訓練されているようには見えなかったし、自分たちに恨みを持つ連中の犯行だろうか。ならば周子だけでも大丈夫だろう。
そう思っていた矢先、仕事用の電話から着信音が鳴る。
「はいもしもしー？どちら様？」と聞けば、周子であった。
「志希ちゃん？あたしあたし、周子だよー。ちょっと任された仕事で問題があってね、手が足りそうにないから腕のいい人紹介してくんないかなーって。」
話を聞けばプロダクション系ではないようだが、数が多いので念のために腕のいい人

間を紹介してほしいらしい。
「そうだねー、それなら一人紹介するよ。ただ向こうにも聞いてみるから、ちょっと待っててくれる？」
「おっけー、待ってる。」
　志希は電話を切断すると、今度はある人物へ電話を掛けた。やはり寝ているのか、いつもよりコールが長い。ようやく相手が出たかと思えば、ロシア語で罵られた。
「ごめんごめん、アーニャちゃん。お仕事の依頼、良いかな？ある人と一緒にカチコミを掛けてほしいんだ。」
「シキ、今、何時ですか？まさか時計も読めなくなりました？」
「だからそれはごめんってば、お題は相場の倍払うから、お願い。急ぎなんだよ。」
　相場の倍、と言う言葉に揺られたのか、渋々と言った体で了承の返事が来る。落ち合う場所と時間を伝えた志希は電話を切断する。周子にも同様の場所と時間を伝えたので、後は二人に任せれば良いだろう。
　二人の仕事の成功を確信した志希は、早くも一件落着と言わんばかりに眠りに就いた。あの二人ならば、ちょうど目がさめる頃に片付いていることだろう。

マパロその05（塩見周子）

友人である一ノ瀬志希から、ある依頼を受けた。彼女は情報屋だが、情報屋だって命を狙われる。そして、狙ってきた組織に報復してほしいということだった。

もちろん依頼なので、対価は受け取る。志希は小金持ちなようで、払いはいいしツケにされたことはない。なのでよっぽど文句も言わずに普段は依頼を受けるのだが――

――今回は少し無理がある。

「志希ちゃん？あたしあたし、周子だよー。ちょっと任された仕事で問題があってね、手が足りそうにないから腕のいい人紹介してくんないかなーって。」

塩見周子は、フリーランスの殺し屋（ヒットマン）兼ボディーガードだ。仕事を始めたのは3年前に実家を追い出された後。貯金も底をつくかという頃に裏社会の人間に拾われて殺しの技術を教え込まれたのはいいが、ある日突然拾った人間が姿を消した。それからは固定の陣営に付くこともなく、気が惹かれた仕事のみをこなしていた。

最近では小早川関連の仕事を受けることも多いが、たまにこうして別の依頼を受け

る。普段は一人で仕事をするのだが、今回ばかりは相手の人数が多すぎるので素直に増援を頼むことにした。志希ならば良い増援を連れてきてくれるだろう。しかし、増援と話をつけるのに手こずっているのか一向に返信がない。暇を持て余した周子は、懐からタバコを取り出すと咥えて火を付けた。タバコも教わってから、ずっと吸っている。あの女は今どこで何をしているのだろうか。

タバコを一本吸い終わった頃、やっと志希から返信が来た。追加の殺し屋一人と運転手が一人。殺し屋の名前を聞けば、ロシア系のような外国の名前と見知ったドライバー。ドライバーに関しては何度か仕事を共にしたことがあり、信用できるだろう。

合流まで少々時間がかかるという事で、もうタバコを吸って潰そうとしたが、タバコを切らしていることに気がついた。仕方がなく、近くのコンビニへと歩き始めた。

裏社会がはびこるこの街だが、意外なことに景観は整っている。整備された道路と街路樹、規制に沿った広告など、せめて表通りぐらいはきれいにしてこうという社会の涙ぐましい努力を感じられる。しかし残念なことに裏道に一本入ってしまえば、飲んだくれはいるわ、たまに襲われている女はいるわと、警官の目が届かない場所は無法地帯だ。

そう言えば、あの娘と出会ったのもこんな裏道だったろうか。

＊　＊　＊　＊　＊

ある日、仕事もなく完全フリーだった周子は、気の赴くままに街を散歩していた。その頃の周子は人に恨みを買う仕事にはまだ手を付けておらず、特に警戒しなくても街を出歩くことが出来ていた。

その年の冬はとても寒く、周子も着込んで出かけていたが冷たい風に身を震わせていた。あまりにも寒いので雪でも降るのではないかと空を見上げた時、何かが横からぶつかった。油断しすぎたかと懐に手を入れながら振り向くと、一人の女が居た。

毛が絡む事無く降ろされた黒髪、そしてその間から覗く整った顔と金色の目。きちんと髪を整えていればさぞかし美しいことだろう。しかしながらその顔は、生気の失せた、虚ろな目をしていた。ぼーっと歩いていたら、急に足を止めた周子にぶつかってきたと言うところだろう。

「へい彼女、どこいくの?」

「・・・どこでも良いじゃない。貴女に関係あるの?」

女が漂わせる雰囲気は、乱れた髪の毛のせいか、どこか妖艶であった。しかし周子は、それを以上に自分と似たような独特な「ニオイ」を感じ取っていた。

「いやーだってキミ、今帰るところないでしょ?見た感じ2日か3日は食べてなさそうだし。あたしの家だってご飯とシャワーぐらいあるよ。」

身なりを見るに、女は路上生活者ではなく、所謂「健全な市民」といったところだろう。事情はどうあれ、食事とシャワーにはつられたようで、目の前の女はわずかに揺らいだものの、承諾した。

「狭っ苦しいところだけど、上がって上がって。」

女は素直に従い、玄関で靴を脱いでリビングへと入る。しかし、そこで足を止めてしまった。

「・・・貴女、本当に一人暮らし？」

「そうだけど？とりあえず、シャワー浴びちゃいなよ。そこ右ね。服は洗濯機の中に入れといて。」

周子の家は一般的なアパートの一室だ。一般的とは言うが、それはあくまで子供がいる家庭が使うものとしては、と言う意味である。つまり、２ＬＤＫのこの部屋は一人暮らしの部屋としては完全に広すぎるのだ。

この国で年若き人間が一人暮らしをしようとすれば、普通はワンルームになるのである。女が驚くのも無理はないが、臭うのでさっさとシャワーを浴びてもらいたかった。

女は何も言わずにシャワールームへと歩いていき、水音を立てる。それを確認した周子は一つの部屋へ急ぎ、仕事道具を隠し始めた。いくら銃器が合法な国とはいえ、流石

に初対面の人間に見せるものではない。手早く高い位置にある棚へ銃と弾を放り込み、鍵をかけた。

そしてそのままタンスから適当にシャツとズボンを見繕い、新品の下着とタオルをつかむ。流石に胸のサイズはわからないので、下だけだが。そのまま脱衣所に置く。食事とシャワーで釣ったので、食事も用意しなければならない。

何が残っていたか、と冷蔵庫を見れば、僅かな肉と野菜、味噌のみ。そういえば本当は今日買い物に出かけていたのを忘れていた。とりあえず肉入り野菜炒めでも作ろうと、フライパンに油を敷く。肉と野菜は軽く湯通ししてからフライパンに投入して、軽く水で解いた味噌を投入し、弱火で少し水気を飛ばす。ありあわせの食材だが、ひとまず完成だ。

周子がリビングでくつろいでいると、女が風呂場から髪を拭きながら出てきた。

「ありがとう、さっぱりしたわ。」

「そっかー、よかった。お腹すいたっしょ?も食事できてるからさ、そこ座って待っててよ。はいこれ水。」

周子は立ち上がって冷蔵庫からボトルに入った水を取り出して女に渡す。女は受け取ると意外そうな顔で、

「あら、水道水でも良かったんだけど。」

「この地区の水道水激マズよ?料理に使うならまだしもそのまま飲むなんて冗談じゃないよ。」
「そうなの。ありがとう。」
　女はソファーに座って、ボトルの蓋を開けて水を飲み下す。そこへ、周子が料理を持ってくる。
「ありあわせの食材だけど、めしあがれー。」
「ごちそうさま、ようやく人心地ついたわ。」
「そか。お粗末さん。」
　周子は皿を持ち、流しへ向かおうとすると、女から声をかけられた。
「流石に貰ってばっかりでは悪いから、洗い物ぐらいさせてくれないかしら?」
「いや、そのまま休んでなよ。勝手もわかんないでしょ?テレビでも見ててー。」
「・・・そうね。なら、お言葉に甘えさせてもらうわ。」
　女はそのまま深く座りなおすと、水を飲み始めてテレビをつける。周子はその様子を横目で見ると、彼女の食事中の仕草を思い返していた。どことなく品を感じさせるその食べ方や、彼女の着ていた服の良さといい、彼女が一定以上の家庭の出であることを思わせる。
　しかし、こんな国で自らそんな良い家を出るということは何かしら厄介事があったの

かもしれない。周子は自分の抱えた問題が案外大きいものだった可能性を考え、内心複雑だった。

周子が洗い物を終え、リビングに戻り女の対面に座る。

「さて、なんか交換条件みたいで悪いけども。キミの事を話してもらってもいいかな？」

そう言い放った周子の目に写ったのは、先程より少し暗い表情を浮かべた女だった。

「何もキミの出自をすべて話せって言ってるわけじゃないよ。名前とか、年齢やらを話してくれるとありがたいなって。あ、あたしは周子。歳は１８ね。」

「…速水奏よ。歳は１７。悪いんだけど、暫く置いてくれないかしら。帰る家が無いの。」

そう告げる奏の顔は、有無を言わさないものだった。周子は仕方なく、それを許す。

「まあ、気が向いたらどうして出てきたのかも教えてよ。さて、寝床なんだけど、ベッド１つしか無いんだよね。流石にシーツとかも予備がないんで、床かベッドどっちかになるんだけど・・・」

「そう、なら床でいいわ。流石にここまでされてベッドまでよこせとは言わないわよ。」

「そか、じゃあ明日早いし今夜は早めに寝ちゃおうか。なんだかんだと１０時過ぎてるし。」

そういうと、奏は何を言っているんだ、という顔を向けてくる。それを見た周子は、

「暫くココで過ごすなら着替えとか生活用品いるっしょー？冷蔵庫の中も何もないし、朝から買い物かなって思ったんだけど」

そう言うと、奏はそうね、といった様子で腰を上げる。

「ところで、その寝床とやらはどこかしら？」

夜の1時。早く寝ようと言ったが、周子は日頃そう早寝しているわけでもないので寝れるはずもなく、延々と考え事をしていた。

当然ながら考え事と言うのは、隣で寝息を立てている奏のことである。ここのところろくに寝ていなかったのか、奏は布団に入ってすぐに夢の世界へと旅立っていた。

どうしてそう経済的に貧しいわけでもなさそうな家を捨ててきたのか。着替えとして渡したシャツからチラチラ見える痣や指の傷を見るに、喧嘩の後だろうか。大方殴られて殴り返してそのまま帰らなくなったのだろう。そのうち帰りたくなるだろうから、それまで泊めておこうと思った矢先、

窓ガラスや黒板に爪を立ててひっかくような音が周子の耳に届いた。この家に黒板なんてものは置いていないから、前者だろう。とすれば強盗か。周子は枕の下に手を突っ込み刃の厚いナイフを掴んで引き出すと、鞘（シース）を払って左手で構える。

耳を澄まして足音を聞けば、男の足音が一つ。響く足音の大きさといい、道具だけは

ある素人だろう。扉の隣に張り付き、男が入ってくるのを待ち伏せる。一歩一歩と、扉に近づいてくる。そして、とうとうドアノブが回され、扉が開く。

そして部屋に一歩踏み込んだ男の首元めがけ、周子はナイフを横にして突き刺す。男の首に突き刺さったナイフを軽くひねってから抜き、もう一度突き出す。今度は男の上顎に刺さり、そのまま脳幹を傷つける。

男は刺された勢いで仰向けに床に倒れ、大きな音がする。そのせいで、奏が目を覚ましてしまった。

「貴女、・・・殺したの?」

奏は目を見開き、覚える表情で周子に問いかける。

「そうだね、殺した。でもこいつは盗人だよ。ひょっとしたらあたし達を殺してからごっそり頂いていくつもりだったかもそれない。そんな奴をみすみす見逃すほど、あたしは甘くないよ。」

周子は男の服で刃に付いた血と油をぬぐうと、ナイフを鞘に戻した。そして、男の懐からある物を取り出して奏に見せる。

「ほら見てこれ。軍用のサバイバルナイフだ。完全に殺しに・・・奏ちゃん?」

奏は完全に怯えきっていた。周子に怯えていると言うよりは、男のナイフに怯えているようで、自らの体を抱いて歯を鳴らす。その呼吸は、自らを苦しめるように過剰に酸

素を吸い込む。
「ちょっと奏ちゃん!?落ち着いて、あたし何もしない！」
今袋持ってくるから、と周子は小走りで寝室を出る。
周子が紙袋を持って部屋に戻ると、奏は失神直前だった。袋を口に押し当て、呼吸を落ち着かせる。しばらくすると、奏の呼吸が落ち着いた。
「どう、奏ちゃん。楽になった?」
「ありがとう、楽になったわ。ごめんなさいね。」
奏は体を起こし、周子を見る。
「・・・あのナイフ、似てたのよ。私の家に入ってきた強盗が持ってたのに。」
そう前置くと、奏はぽつぽつと何があったかを話し始めた。彼女の家は比較的裕福で親との仲も良好だったが、どうやら三日ほど前に彼女の家は強盗の被害に遭ったようで、父と母が盾になり奏だけ逃げ出せたらしい。恐怖心からずっと逃げ続け、周子と出会い、今に至る。
それを聞いた周子は、温室のような環境で育った娘には、酷な話だと思った。
「そか、怖かったね。よく頑張った。」
周子は奏を抱きとめ、背中を叩く。そして、あることを思いついた。
「奏ちゃん、親の敵とりたい?」

「・・・取りたいけど、どうやって、」
「しゅーこちゃんの友達に人捜しが得意なのが居る。もし奏ちゃんが犯人の特徴を覚えているなら、見つけられるかもしれない。」

＊　＊　＊　＊　＊

周子が物思いに耽っていると、自らを呼ぶ声に引き戻された。声のする方を向けば、以前にも会った運転手と見慣れぬ銀髪を持った娘。
「ごめーん、待たせちゃった?」
「待ったというか、あまりにもぼーっとしてたから薬でもキメたのかと思ったぞ・・・アーニャ、紹介する。こいつが周子だ。今回はこいつと組んでくれ。」
目の前の運転手の後ろに居た銀髪娘が周子を上から下まで眺めてアナスタシア、と一言だけ発する。
「よろしくね、アナスタシアちゃん。あたし周子。」

軍人でもない人間ならば、作戦は緻密なものよりも大雑把で余裕のあるものが良い。何故ならば、軍隊で鍛えられた人間でなければ時間通り動くのは非常に難しいからだ。

アタシが前衛、アナスタシアちゃんが後衛。あたしが殴り込んで、外に出ようとしたり回り込もうとする敵をアナスタシアちゃんが撃つ。

実際に乗り込んでみれば寄せ集めの集団を各個撃破するのはそう難しくはなく、順調に数を減らしていった。しかし、途中で手持ちの弾が尽きてしまう。

「アナスタシアちゃーん。弾ちょうだい弾。」

と聞けば、あたしの銃では使えない弾らしい。仕方なく、腰のホルスターに拳銃を戻し、ナイフをそれぞれ両手で鞘から引き抜く。姿勢を低くして敵に向かって走り出す。

狙いを絞らせないように軽く左右に動けば弾頭が奏でるソニッククラックの音。相手の懐に入って喉を切り裂き、血が吹き出る体を掴んで盾にする。敵は無情にも、味方だった男ごとあたしを撃とうと死体めがけて乱射するが、男の着込んでいた防弾ベストで弾が止まってしまう。

弾切れになった敵は弾倉を変えようとするが、その隙を見逃さずに左手でナイフを投げつける。ナイフは吸い込まれるように男の脳天に突き刺さる。そういえば鳴り響いていた銃声が聞こえないな、と見渡せば立っていたのはアナスタシアのみ。

敵は全て死体に変わっていたようで、床は血で赤く染まり、ところどころに薬莢が光り輝いている。

「シューコ、こっちは終わりました。」

「おっけースターシャちゃん。帰ろうかッ！」
アナスタシアの後ろで動き出そうとした男めがけて右手でナイフを投げれば、狙った脳天ではなく首元に突き刺さる。ナイフを目で追っていたアナスタシアちゃんは、その男の頭にトドメを刺し直した。
「ヘタクソ、ですね？」
初めてアナスタシアが笑ったのを見たのは、小馬鹿にされたときだった。

近くに泊めておいた車に乗り込めば、運転手はすぐに車を走らせた。途中、サイレンをけたましく鳴らすパトカーや警察のバンとすれ違った。特殊部隊でも連れているのだろうが、生憎残っているのは死体だけだ。
ナイフはそれなりに値が張るので、回収してある。足が付くこともないだろう。心配事はない、とのんきにシートに身を沈めていると、突如リアガラスに蜘蛛の巣がいくつも出来た。
「後ろからバイク！２両！」
アナスタシアの叫び声を聞いてドアミラーを見れば、二人乗りしたスポーツバイクが２台追いかけてくる。
「これ、防弾は？」

運転手に尋ねれば、５．５６ｍｍまでという頼もしい返事が帰ってくる。追手は短機関銃を撃ってきているだけなので、まず弾が車内に入ることはない。しかしこのまま放置していても埒が明かないので、運転手から拳銃を借りてドアを開けて車外に乗り出す。風で顔に自分の髪が当って地味に痛い。

的を絞らせまいと左右に動く車からちょこまかと動くバイクを狙うのは難しかったが、何発か撃てばバイクの運転手に命中し、バイクはそのまま転んですっ飛んでいった。もう一両の方は、アナスタシアが片付けていた。

真っ白になった防弾ガラスというのはかなり目立つので、途中で乗り換えた上で解散地点に到着した。後は家に帰るだけだ。

その０６

――昔々、あるところに病弱な女の子がおりました。彼女は体が弱いというよりも、強烈な病気が他の病気と合体して彼女の健康を脅かしていたのです。

といっても、それはアタシのことなんだけど。１０代半ばに病気を治療できたアタシは、今現在警官として日々職務に励んでいる。そして、この街をそれなりに気に入っていたアタシはギャング対策課に入った。

警官として2年目が過ぎた頃、アタシの治療のために親がヤミ金で多額の借金をしたことを知った。借金の額は利子で膨れ上がっていた。アタシは利子を打ち消す代わりに内部情報の漏洩を命令され、どうしようも無かったアタシは渋々それを受けた。

しかしそれも下っ端では上手くは行かず、結局のところ利子はつき、借金はほとんど減ることがなかった。いっそあの組織を潰してしまえないだろうか。そう大きい組織でもないし、何かいい情報でもあれば全て締め上げることが出来るだろうに。何より裏の借金があることが発覚すれば警官は続けていられなくなる。

そしてまた1年が過ぎた頃、この街の裏社会を揺るがす出来事が起き始めた。

巨大な組織（プロダクション）の進出と強烈な麻薬（ミシロ）の流通である。

プロダクションは情報統制を徹底しているようで、なかなか尻尾をつかむことが出来なかった。半年かけてわかったことといえば強力な武力を持って居るということだけ。

それも先走った地元者がコテンパンに叩きのめされた挙句に関連組織ごと壊滅状態に追い込まれてシマを乗っ取られたらしい。それを聞いたアタシは、これを利用しない手は無いと、計画を練り始めた。

偽情報を流して組織を先走らせる？無理だ。いくらあいつらがバカでも情報程度で先走ることは無いだろう。ならば、実害が伴ったら？無駄に武闘派な組織だ、きっと頭に血が上るに違いない。

手始めに、借金先組織の系列を調べ始めた。幸いアタシはギャング対策課に居るので、その手の情報を確認するのに事欠かない。その中から小さい事務所を探す。これは成功だ。

そして武器。警官であるので銃器を仕入れる事に大きな障害は無いが、生憎民間用の銃では単射（セミオート）しかないし弾薬も能力が低い。これはツテで解決。完全に違法だが、これからもっと大きなことをするのでココで立ち止まるわけにはいかなかった。

そして技術。幸い対策課は課員への訓練をそれなりに実施しているので、少し復習するだけで済んだ。

最後に戦力。いくら突入先が小さいとは言え、一人で正面から突撃するのはバカのすることだ。足がつかないように気をつけながら、弾除け程度の人間を数人雇い入れた。準備は数ヶ月かけて行ってきた。もう引くことも出来ない。これは必ず成功させるしかないんだ。

＊　＊　＊　＊　＊

最低限の所持品だけ持ってアパートを出た。アタシが次にここに戻ってくるのは全て終わった後か、あるいは死体になってからだ。

予め目星を付けておいた無法者の事務所に、雇った無法者と一緒に殴り込んだ。残念ながら雇った連中は弾除けにしかならなかったが、目標である事務所の殲滅は成功した。

事務所に詰めていた人間を制圧し終わった後、アタシはアタシは生き残ってしまった弾除けを後ろから撃ち抜いた。計画が無事に進んだことに安堵したアタシは、まだ息がある人間に気づけず、額目掛けて飛んできた何かと逃げ出す足音にもう一手間掛ける煩わしさを感じた。

＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　：　奈緒

加蓮が無断欠勤を続けるので、加蓮のアパートを訪ねてみた。ベルを鳴らしても返事がないので、合鍵を使って扉を開ける。

電気は付いておらず、カーテンも閉まったままだ。玄関で靴を脱いで上がって廊下を歩く。奥にあるワンルームが彼女の生活圏だが、部屋には殆ど何もなかった。

部屋を見渡すとテーブルの上に黒い塊が置かれていて、見ればそれは支給品の拳銃と警察手帳（バッジ）だった。

「どういう意味（ごと）だよ・・・」

あたしは誰に言うわけでもなく、一人つぶやいていた。

署に戻ったあたしを待ち受けていたのは、緊急出動だった。なんでもマフィアの事務所が一つ襲撃されているようで、激しい銃撃戦が繰り広げられているらしい。

あたし達対策課も当然駆り出されるわけで、急ぎ防弾チョッキを身に着けてパトカーに乗り込む。今回は荒事専門の部隊（SWAT）が別の事件で出払っているので残念ながら対策課

が最先鋒となる。
無線から聞こえてくる情報に耳をすませば、銃撃は落ち着きつつあるらしい。
現場についてみれば、すでに銃声は完全に鳴り止み、辺りは野次馬と、それを近づけまいとする警察官に、事務所から弾が飛んで来るのではないかとにらみ続ける警察官ばかりだった。
あたし達対策課が現場の事務所に突入しても、内には鉛が穿ったのであろう穴と、血と、死体で装飾された前衛的な内装ばかりであった。
扉という扉、家具という家具をひっくり返してもトラップすらなく、鑑識課を呼んで証拠を回収しようと言う段にもなって、あたしは床に薄く残る血痕とそれを追う足跡に気がついた。ただの足跡のはずなのに、あたしはその足跡が気になって仕方がなく、気づけば足跡を追いかけ始めていた。
足跡は歩幅が小さく、足跡そのものも小さい。女性か、あるいは子供。一定の間隔で残っているのを見るに、何か訓練を受けている人物だろう。
足跡を追った先には、血溜まりに沈む一人の男と、その傍らに立っている、よく知っている人物だった。それに驚いたあたしは、足元に転がっている空き缶に気が付かなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　：　加蓮

全て殺したと思った敵の中に一人だけ生存者がいたようで、そいつは血を流しながら走っていた。これが偽情報を流すための行動である以上、生きて逃がすわけには行かないので当然アタシも追いかける。途中で血溜まりかなにかを踏んだのか、足跡が残っていくがそんなのお構いなしだ。

相手は弱っていたようで、追いついたところに後ろから蹴りを入れるとすぐに地面に倒れた。トドメを刺すべく銃を向けると、そいつは腰を抜かしたのか近くの壁に這いずって、もたれかかるようにしてこっちを見た。

「殺さないでくれ」だとか「誰にも言わない」とかゴチャゴチャと言っているけど、アタシは何も気にせずに引き金を引く。手に持った拳銃は、減音器（サプレッサー）によってプシュン、と控えめに銃声を鳴らす。

これであの事務所に詰めていた人間は皆死んだ。隠れ家に帰るため、銃をホルスターに戻そうとした時、カランと何かが鳴った。

咄嗟に音のした方に銃を構えると、そこには防弾チョッキを纏った奈緒の姿があった。

「加蓮…？」

奈緒がつぶやく声が聞こえる。アタシが奈緒に銃を向けても、彼女は呆けたままだった。

「ごめん、奈緒。」

アタシは弾丸と一緒に、その一言を放った。

倒れた奈緒をそのままに、アタシが現場を離れて1週間。そして、連中に白昼堂々と拉致されてから多分3日目。アタシはどこかの暗い部屋に、閉じ込められていた。

その０７　（新田美波）

ある春。私はいつもどおり大学に通っていた。この国で大学まで通えるのは一握りで、それは家にお金があるか、文字通り血を吐くほど勉強して奨学金を得た人間のみだ。

私は前者だが、かと言って勉強を怠けたつもりはない。中高と精力的に勉強に取り組み、部活動にも打ち込んできた。だからこそ私は胸を張って大学の門をくぐることが出来る。だけど当然、家柄に任せて勉強を怠けた、いわゆる”ボンボン”もいる。そういった人たちはお金に余裕があるからか、危ないものに手を出している人たちもいる。当然そんな人たちには近寄らないが、いわゆる見た目が整っている部類に入る私は近寄らなくても向こうから来てしまう。

「ねぇ美波ちゃん、今日この後暇？」

「ごめんなさい、今日もちょっと予定があるので…」

極力全て断るが、中には強引で、それでいて薬物や酒におぼれているような人もいる。この人もその類だともっぱらのウワサな上、ここのところしつこく絡んできている。正直突き飛ばしてでも立ち去りたかった。

「そっかー。それじゃあさ、よかったらこれだけでももらってよ。良いものだからさ。」

「ちょっと、何するんですか!」
男が私の鞄に何かを無理やり突っ込んできたので、押し飛ばして距離を取った。流石に騒ぎになったのか、周りにいた女子生徒が集まってきて男を詰り始める。形勢不利と見た男はそのまま走り去っていった。
「美波ちゃん、すぐ来れなくてごめん!怪我とかなかった?」
「大丈夫です、助かりました。」
「お節介かもしれないけど、やっぱり忙しくても誰かと一緒に帰ったほうが良いよ、一人じゃ危ないって。ただでさえ美波ちゃんは目立つんだし。」
心配してくれる優しい先輩との会話も程々に切り上げ、私は家路を急いだ。

＊　＊　＊　＊　＊

家に着くと、私は突っ込まれたものを探すのも忘れて部屋の片付けと料理を始めた。久々にアーニャちゃんが来るのだ、どうせならしっかりもてなしてあげたい。彼女も何をしているのか、特に最近は帰っていないことが多い。久々に帰ってくると言うので、どうせなら一緒に過ごそうと提案したのは私だった。彼女は肉じゃがが好きだそうだから、それだけは昨日の晩から仕込んでいる。

細身な割にガッツリめな物が好きなようだから、もう一品加えよう。冷蔵庫の中身的には唐揚げか鶏天か…メニュー的には鶏天だろうか。解凍するために台所においておいて、その間に手早く洗い物と炊飯を済ませる。そして鶏天の仕込みも済んで後は揚げるだけというころ、インターホンが鳴った。カメラ越しに確認すれば、待ちわびていたアーニャちゃんの姿が。鍵を開けて迎え入れる。

「久しぶり、アーニャちゃん。」

「ダー。久しぶりですね。」

「ご飯、もうちょっとかかるから先にシャワー浴びちゃって？」

はい、と彼女は笑って風呂場へ向かう。彼女がシャワーの栓を音で確認した私は、鶏肉を揚げ始める。その途中でタオルを準備していないことに気がついたので、素早く脱衣所に届けておく。

「アーニャちゃん？タオル置いておくね。」

「スパシーバ、ありがとう、です。もうすぐ出ますね。」

脱衣所からキッチンへと戻る途中、自分の鞄を見てふと昼間のことを思い出した。食事前のこの時間に嫌なものを見たくはないが、鶏天を油から上げたら忘れぬうちにやっつけてしまおう。

鶏天を油から上げ、皿に盛り付けてからカバンの中身を一つづつ出していくと、底の

方に見慣れぬものが入っていた。みればそれは何かのお菓子のようだが、そんなものを入れた覚えもないし、他に覚えのないものは入っていなかった。手に持って首を傾げていると、アーニャちゃんがこっちを見ていた。彼女は私の手にあるものを見ると、恐ろしい表情でこちらへ近づいてくる。そして彼女は私の手から菓子らしきものを乱暴に剥ぎ取ると、私の理解できない言葉をつぶやいた。

「ミナミ、いけません！なんでこんなもの持ってますか!?」

そう叫んだ彼女の顔は、今までに見たことのないほどの恐ろしさだった。

「待ってアーニャちゃん、どうしたの!?これ、ただのお菓子じゃないの!?」

あまりの剣幕に、思わず私も大きな声を出してしまう。その声を浴びた彼女は、はっとした表情でこちらを見る。

「ミナミ、これは…ナコーチキ…ドラッグ、です。それも、とても強い。こんなもの、どこで手に入れましたか?」

「…大学の先輩から、押し付けられたの。その時はこれは見えなかったし、急いでたからその場で捨てることもしなかったの。」

「そうですか。…これはアーニャが預かりますね?」

そう言うと彼女は、薬物を自らの鞄に放り込んだ。

「ごはん、食べましょう。せっかくミナミが作ってくれました。これは肉じゃがの匂い

ですね？」
彼女はいつもどおりの笑顔で、私に微笑んだ。

食事も終わり、いざ寝る寸前になると彼女は薬物を渡してきた人物は誰か、と尋ねてきた。確かサトウだという名前だったと思う、と答える。おそらく警察系の仕事に就いているのであろう彼女のことだ、彼を逮捕するのだろうか。手を出さないであげて、と言うと彼女は「優しいですね」と微笑んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

夜が明け、朝日で目が覚めた私は彼女に大学に行く旨を伝えると、彼女はしばらくゆっくりするそうなので、合鍵を預けておいた。そして大学に行くと、件の男が近寄ってきた。無視しようと思っていたが、
「ねえ美波ちゃん、プレゼント気づいてくれた？」
にやけた顔でそんなことを言ってくるものだからついカッとなって、
「ふざけないでください。今回は見なかったことにしますけど、次は警察に通報します。もう、近寄らないでください。」

と言ってしまった。その言葉を聞いた男は、顔を真っ赤にして私を突き飛ばしてきた。たかだか学者の家の分際で、ちょっと見た目が整ってるから、だとかなんだと言われた気がするが、流石に周りにいた人たちが止めに入る。

そしてそれ以降、ふとした時に人の気配を感じることがある。帰り道や大学構内と、様々な場所で気配を感じる。気のせいであってほしいがストーカーだろうか。一応、アーニャ含め周りの人には知らせてあるし警察にも相談したが、ここしばらく気が気でなかった。最近はアーニャちゃんも忙しいようであるし、家の近所に知り合いが居ないのは困る。一応セキュリティは強固な家に住んではいるが、外で襲われたりすれば意味は無いのだ。

そうして少しの恐怖を感じながら一週間を過ごした頃、再びアーニャちゃんと夕食を共にすることになった。大学の帰り、スーパーで食材を買って家路を歩いていると、突然前に男が現れた。男はフードを目深に被っており、その顔を見ることは出来ない。

あまりの気味悪さに来た道を戻ろうかと思ったが、ひとまず道の反対側に避けて通り過ぎようとする。そして通り過ぎようとした時、

「———どうしてなんだ。」

男が突如喋り始めた。

「どうして僕と仲良くなってくれないんだ。どうして僕を避けるんだ。」

あまりの気味悪さに、とうとう私は足を止めてしまった。
男がポケットから何かを抜いて、私の意識はそこで途絶えた。

次に目が覚めた時、私は男臭い部屋の中にいた。ガムテープによって手足は縛られ、口は塞がれている。そして目の前には、サトウの姿があった。サトウは目の色を変え、いかにも興奮していますといった状態だ。
「おはよう、美波ちゃん。わかってると思うけど、騒がないでね。騒がれたら、僕が何するか僕もわからないんだ。」
嫌だ、こいつとここにいてはいけない。本能でそれを察し、私は逃げようともがくが手足を縛られているのでどうにもならない。そしてサトウは、私の服に手を掛ける。
「君が僕を拒絶するからだよ、だったら無理矢理にでも手に入れるしか無いじゃないか。」
私は全力で抵抗する。すると、足がサトウの腹に当たったのかサトウが腹を抑えて後ろに転がった。
それが更にサトウを興奮させ、サトウは少し大きな声を出しながら私に馬乗りになり、私の頬を叩いた。カッとなった私は全力でサトウの股間を蹴り上げ、怯ませる。そして、全力で叫ぶ。口が塞がれているのであまり大きな声にはならないが、外の誰かが

気づいてくれることを願って全力で叫ぶ。
「無駄だよ、この部屋の壁は厚いからね。そんな声じゃ隣の部屋にも聞こえないさ。」
そして体勢を立て直したサトウが再び私に馬乗りになり、今度は頬を拳で殴ってきたその時、大きな音とともに扉が開け放たれた。
その扉から入ってきたのは、拳銃を携えた女性だった。

＊――――＊

夕飯を一緒に食べようと美波が誘ってきたのに、部屋に帰って来ない。電話しても出ないのでスーパーまで歩いていけば、美波の買い物カバンが道端に落ちていた。
――しくじった！
美波に男がつきまとっているのは知っていたが、うかつに動いて正体を知られるわけにも、追われる要因を増やすわけにも行かなかったので警戒を強めるだけにとどめていたが、これならば最初から男を始末しておくべきだった。
ただのボンボン薬中に度胸は無いだろうと高を括ったのは大きな間違いだった。急いで自分の家に走り、ヘルメットも程々にバイクに跨る。ナビは男の家に設定し、スロットルを全開まで回す。

――どうか間に合え。奴の手が美波に触れる前に。

＊　＊　＊　＊　＊

男の家はアパートだ。実家が金持ちなおかげかセキュリティが少し固いが、幸い日も落ち十分な暗さがあるのでパルクールで3階の内廊下に飛び込む。予め調べておいた男の部屋の前にたどり着くと、どうやらアナログ錠のようだ。ピッキングしてやろうと懐に手を突っ込むが、今日は道具を携帯していなかった。やむを得ないので一度外に戻る。そしてあることを思い出した私は、携帯電話を取り出してコール。時間が惜しいので肩で挟んで相手が出るのを待ちながら、工具をツールボックスから出し、部品に偽装しておいた消音器をバイクから外す。そしてそのタイミングで相手が電話に出た。

「シキ、遅い！」

「にゃーっはっはーごめーん。ご飯食べてた。なんか用？」

「アナタの知り合いに使える警官いましたね？この間調べさせた住所にそいつをよこしてください。ミナミが捕まりました、今から乗り込みます。」

ちょっとタイム、と彼女は電話を離れる。急いでいるのでイライラするが、向こうでなにか話している様なので件の警官に連絡しているのだろう。

「おっけー。１０分で着くって。それまでに逃げなきゃ追っかけられちゃうよ?」

私は電話を切ると、ポケットに放り込む。ヘルメットをかぶり直して、再び３回までよじ登る。そして静かに鍵をピッキングして、静かに玄関を開ける。玄関に入った時、美波の悲鳴が聞こえた気がした。

思わず廊下を突き進む。静かにやるつもりだったが、悲鳴を上げている美波に居ても経っても居られなくなった。ガン、ガン、と靴を踏み鳴らして一番奥の扉を蹴破る。

ヘルメットのシールド越しに見えたのは、誰かに覆いかぶさり、拳を振り上げている男の姿。男越しに見えるのは、亜麻色の長い髪。何時かみた色の服。

躊躇せず引き金を２回引く。放たれた弾は男の右肩に２つとも命中し、男が倒れ込む。左手で拳銃を構えたまま、右手で男を投げ飛ばして下敷きになっていた人物を見ればやはり美波で。声を掛けて抱きしめたい衝動に駆られるが、流石に殺しを見られた以上この場で正体を明かす訳にはいかない。苛立ちを抑えながら、美波にシーツを掛ける。このまま残りたい気持ちに引かれながらベランダに出て、雨樋を伝って降りる。一刻も早くここを離れるべきだ。

そして、美波が帰って来たときに安心できるように、家にいるべきだ。そう思いながらバイクで走り去る。

＊――――＊

バシバシ、と乾いた音と共に、サトウが突如として私に倒れ込む。何が起きたのかわからず、そのまま呆けていると闖入者（ちんにゅうしゃ）はサトウを腕一本で投げ飛ばし、私にシーツを掛けてくれた。

フルフェイスのヘルメットに阻まれて顔は見えないが、やはり女性だ。彼女はそのままベランダから飛び降りたと思えば、バイクのエンジン音が遠ざかっていく。どこか聞き覚えのある音だと思ってベランダに駆け寄ると、床にあるものが落ちていた。これは見覚えがある。間違いなくアーニャちゃんの持ち物だ。

でも何故、ココに落ちているのだろうか。考える暇も無くまた足音が聞こえ、私は物陰に隠れる。部屋に飛び込んできたのは、髪の長い警察官だった。警察官らの姿を見て、安心して涙を浮かべてしまった。

警察官に保護された私は、そのまま救急車に乗せられて検査入院となった。殴られた他には特に外傷もなく、縛られていた部分も特に問題はないらしい。

入院中に事情聴取を受けたが、サトウを撃った人間に関しては何も知らないと答えた。しかし、それは嘘だ。私はあれがアーニャちゃんであることを心の中で確信してい

る。

1日の検査入院を終えて帰宅した私は、現場で拾った、キーホルダーを眺めていた。それはアーニャちゃんの携帯に付いているものと多分同じで、白いキーホルダーだ。

このキーホルダーは、私がアーニャちゃんにプレゼントしたものとよく似ている。彼女の髪をイメージした、雪の結晶のような形をしている。

もし本当に、私を助けたのがアーニャちゃんなのだとしたら、何故彼女はあそこがわかって、拳銃を持っていたのか。もし司法職員なら、なぜ犯人を拘束せずにベランダから脱出などしたのか。

ひょっとしたら、彼女も裏社会の一員なのかもしれない。そんなこと思いもしなかったが、彼女の行動が後ろめたいなにかを抱えていることを示している。やはり本人に聞くべきなのだろうか。

だが彼女はこれまでそういったことを明かすどころか、匂わせることもしなかった。黙っているということは、探らないほうが良いのではないだろうか。

長く考えていたつもりはなかったが、直に夕飯の時間になってしまう。ひとまずキーホルダーをテーブルに置いて、私はキッチンに立つ。今日はあの日の埋め合わせとしてアーニャちゃんと夕食をとるのだ。どうしても気になってしまえば、そこで聞いてしまえばいい。

＊　＊　＊　＊　＊

アーニャちゃんとの食事も終え、食後のティータイムを過ごしている時、私はキーホルダーのことを尋ねてみた。
「ねえアーニャちゃん、携帯のキーホルダー落とさなかった？」
「あー、はい。ここ数日の間に、どこかに落としてしまったようです。イズヴィニーチェ、ごめんなさい。せっかくもらったものなのに…」
彼女はシュン、とした様子で落ち込む。やっぱり、と私はテーブルにキーホルダーを置くと、彼女は顔を明るくした。
「ミナミ、拾ってくれたんですね！スパシーバ！」
彼女はその場で携帯にキーホルダーを付け直している。
「…ねえ、アーニャちゃん。それどこで拾ったと思う？」
やめろ、頭の中で声がする。聞くべきではない、自分がそう言っているがもう止まれない。
「アー、どこでしょう？」
「それね、私が一昨日捕まっていた部屋で拾ったの。私を助けてくれた女の人のポケッ

トから落ちたんだ。それと、その人はバイクで走り去っていったの。」

彼女の顔が凍りつく。

「ねえ、アーニャちゃん。もしかして、助けてくれたのは、アーニャちゃんなの？」

言ってしまった。彼女はうつむき、その髪で表情をうかがい知る事はできない。しかし、肩が震えている。テーブルに置かれた手は、拳を強く握りしめている。

「もし、そうならお礼を言わせて。ありがとう。それと、こんな追い詰めるようなことをしてごめんなさい。きっと、隠していたよね。ごめんね。」

そしてしばらくの沈黙が部屋を包んだ。お茶冷めちゃったね、と淹れ直すために立とうとすれば、彼女が突如と立ち上がって、私の袖口を掴む。

「謝らないで、ください。結局、私はミナミを守りきれませんでした。」

そして彼女の、独白が始まった。

＊――――＊

家族がロシアンマフィアの一員だった私は、その生活が嫌で家から逃げ出してきた。しかし幼い私にはまっとうな稼ぎを作る術もなく、結局裏社会へと堕ちてしまった。

そして私が美波の家の近くで倒れていたあの日、私は美波の優しさに溺れてしまった。その優しさに依存してしまった。本来ならすぐにでも縁を切るべきだったし、そも

そも関わるべきではなかった。
そんな呟きに近い弱音すらも、彼女は受け入れてくれた。
＊――――＊
アーニャちゃんの独白を聞き、一緒に眠りに付いた次の日の朝、私が目覚めると彼女は既に起きていた。
そして朝食の途中で、彼女は街を出るという。私に正体を知られてしまったし、迷惑をかけるかも知れないからだというが、私はそれを引き止めた。
私は彼女のことを恐れていないし、一人にしたくなかった。私は彼女のことを強いと誤解していたが、彼女はむしろ弱かった。だからこそ、一緒に居たい。
そう伝えた彼女の顔は、微笑んでいた。